

ショートショート5モデル比較

01 種明かし型

Opus5.5
「いつもの」
 源さんの床屋は、今日も静かだった。 ラジオも鳴っていないし、待合のソファに雑誌もない。それでも客は途切れずにやってくる。不思議なことに、どの客も初めて見る顔なのに、椅子に座るなり決まってこう言うのだ。
「源さん、いつもの感じでお願いします」
いつもの、と言われても困る。だが源さんは五十年この仕事をしてきた。頭の形を見れば、その人に似合う長さくらいは分かる。
「はいよ」
櫛を通し、鋏を入れる。しゃきん、しゃきん。手に馴染んだ感触だった。ただ、近ごろは床に髪が落ちない。掃除の手間が省けていいが、少し張り合いがない。
鏡の具合もおかしかった。客の顔を映すはずの鏡には、いつのまにか中庭の植え込みが映っている。ガラスを替えたのは誰だったか、思い出せない。
「はい、おしまい」
肩のタオルを外すと、客は嬉しそうに頭を撫でた。
「さっぱりしました。ありがとうございます」
そして代金を払わずに出ていく。源さんは呼び止めない。ツケの客なのだろう。昔はそういう客がたくさんいた。
午後、若い娘がやってきた。目元に見覚えがある気がした。
「いつもの、お願いします」
源さんが鋏を動かしていると、娘は鏡越しにこちらを見て、ぼつりと言った。
「おじいちゃん、上手だね」
「おじいちゃんはよしてくれ。まだ現役だ」
「そうだね。ごめん」
娘は笑ったが、その目は少し赤かった。花粉の季節だからな、と源さんは思った。
帰り際、娘は入り口の白い服の女性に何かを渡していた。この店に受付なんて雇ったかな、と源さんは首をかしげ、また櫛を手にとった。次の客が来る前に、道具の手入れをしておかなければ。
――――
『介護記録 十月九日 ひまわり棟三号室 佐伯源一郎様』
午前、本日も「床屋さん」をされる。職員四名、順番にお客様役。機嫌良好。
午後、お孫さんの美咲さん来訪。お客様役をしてくださる。一度「おじいちゃん」と呼ばれたが、ご本人に混乱なし。
鋏は引き続き、刃を落としたものを使用。床屋のご経験から、手つきは今も大変丁寧。

Gemini3.8F
「静かな隣人」
 男は毎晩、壁の向こうから聞こえる奇妙な音に悩まされていた。 「カサリ、カサリ」と何かを引きずるような音に続いて、「トントン」と小刻みに叩く音が響く。時計の針はいつも午前二時を回っていた。隣室に住んでいるのは、引っ越してきたばかりの物静かな老人だ。昼間にすれ違っても軽く会釈をするだけで、決して声を発しない。
ある夜、男は我慢の限界を迎えた。壁際へ歩み寄り、耳を押し当てる。今夜の音は一段と激しかった。「ギィ、ギィ」ときしむような音の合間に、かすかな溜め息のような息遣いまで混じっている。男の脳裏に、不穏な想像が次々と浮かんた。家具を動かしているのか？何かを解体しているのか？それとも、誰かを閉じ込めているのではないか。
男は壁を拳で強く叩いた。「ドン、ドン！」
すると、隣の音はピタリと止んだ。しかし数秒後、壁の向こうから、今度は爪で引っ搔くような「カリカリ」という音が返ってきた。挑発されているように感じた男は怒りを爆発させ、スリッパを引っ掛けると部屋を飛び出した。
隣の部屋のドアベルを激しく連打する。「おい、開けてくれ！夜中に一体何をしているんだ！」
返事はない。ただ、ドアの隙間からかすかに風が吹き出していた。よく見ると、鍵穴も郵便受けもなく、あるはずのインターホンのボタンもプラスチックのダミーだった。
男が呆然としていると、背後から白い服を着た大柄な職員が歩み寄ってきた。「ああ、患者さん。また部屋を出てはいけませんよ。お隣の部屋は空き室ですし、あなたの壁の向こうにあるのは、施設の中庭ですよ。ほら、木々の枝が風で窓に擦れているだけです」
職員の手には、消音マットと拘束帯が握られていた。男は自分の両手を見つめた。両の手のひらは、夜毎に壁を激しく叩き続けたせいで、赤黒く腫れ上がっていた。

Opus4.6
「常連客」
 午前七時、喫茶店「しずく」のドアベルが鳴る。マスターの浩一は顔を上げずに言った。「いつもので」返事はない。いつものことだ。その男はカウンターの一番奥、壁際の席に座り、一言も発さない。注文はいつも同じ――ブレンドコーヒーのブラック。浩一が淹れたコーヒーを置くと、小さく頷くだけ。新聞も読まず、スマートフォンも触らず、ただ湯気を見つめている。
三十分きっかりで席を立つ。代金をびったり置いて、出ていく。
もう六年になる。
浩一はその男のことを何も知らなかった。名前も、職業も、どこに住んでいるのかも。他の常連が「あの人、何者？」と聞きたびに、「さあ」と笑って返した。
ある朝、男が来なかった。翌日も、その翌日も。一週間が過ぎた頃、浩一は妙な喪失感に気づいた。あの静かな背中がないだけで、店の空気が変わる。
二週間目の朝、若い女性が店に入ってきた。
「あの、こちらに毎朝いらしていた男性をご存知ですか」
浩一は頷いた。
「父です。先日、亡くなりました」
女性は紙袋をカウンターに置いた。
「遺品を整理していたら、日記が出てきまして。読んでいただきたくて」
大学ノートだった。几帳面な字がびっしり並んでいる。浩一はページをめくった。
日付ごとに書かれていたのは、すべて浩一のコーヒーの味の記録だった。湯温、蒸らしの秒数、豆の状態、抽出の速度――客席から見ているだけで、それらを驚くべき精度で推測し、記述していた。そして毎日の最後に一行、同じ言葉が添えられていた。
「今日も、完璧だった」
女性が言った。「父は元々コーヒー焙煎の職人でした。引退してから毎日ここに来ていたそうです。日記の最初のページに、こう書いてあります」
浩一は最初のページを開いた。六年前の日付。
「ようやく見つけた。私の豆を正しく淹れる人間を」
浩一の手が止まった。仕入れている豆の焙煎元。個人工房の名前。あの男の名字と同じだった。
六年間、何も喋らなかった常連客は、六年間、ずっと自分の作品を見届けに来ていたのだった。

Grok4.7
（タイトルなし）
 彼女は毎晩、夫の枕元に座ってその日の話をした。夫は目を閉じたまま、時折小さく頷く。子供が初めて歩いた日のことも、近所の桜が散ったことも、すべて聞いているように見えた。
一年が過ぎ、ある朝彼女はふと夫の手を取った。冷たく、硬かった。
一年前の朝から、夫はすでに息をしていなかった。
頷きも、微かな笑みも、すべて彼女の耳が作り上げたものだった。子供の一步も、桜の花びらも、夫は何一つ見ていなかった。

ChatGPT6（Chat版）
「出発進行」
 廃線になって十五年。町外れの古い駅には、もう列車が来ない。 それなのに毎晩八時十分になると、駅のホームに一人の老人が現れる。色あせた駅員の制服を着て、誰もいない線路に向かって笛を吹き、白い旗を振るのだ。
「出発進行！」
その姿を見た人々は、幽霊駅長だとか、昔の仕事を忘れられない変わり者だとか噂した。
気になった私は、ある晩、老人に声をかけた。
「列車なんて来ないのに、何をしていますか」
老人は微笑み、線路の向こうを指さした。
そこには小さな病院があった。三階の窓に、パジャマ姿の少年が見える。頭には紙で作った車掌帽をかぶり、小さな手を懸命に振っていた。
「あの子は病気で、ずっと外へ出られないんです。でも、いつか世界中を列車で旅するのが夢でね」
老人は少年に向かって、もう一度旗を振った。
「だから毎晩、ここから旅に出るんです。あの子が車掌で、私は駅長というわけです」
少年は嬉しそうに敬礼した。
私は初めて気づいた。
この駅では、列車がなくなった今も、毎晩一人の旅人が出発しているのだ。

ショートショート5モデル比較

02 転落型

Opus5.5
「身代わり人形」
 骨董屋の老人は、その木彫りの人形を「身代わり」と呼んだ。
「持ち主の不運を、こいつが代わりに引き受けます」
信じたわけではなかった。ただ、その頃の私はあまりに運がなかった。会社では手柄を横取りされ、恋人には去られ、雨の日に限って傘を盗まれる。千円で気が済むなら安いものだと思った。
効果は翌日から現れた。
乗り遅れた電車が事故で止まり、私だけが難を逃れた。担当していた赤字の企画が、なぜか急に当たった。課長が栄転し、空いた席に私が座った。宝くじで三等が当たり、行きつけの喫茶店の店員と付き合うことになった。
そのたびに、棚の上の人形に小さなひびが入った。
最初は額に一本。次に頬に一本。昇進の日には、胸に大きく一本。私は気にしなかった。身代わりなのだから、傷つくのが仕事だろう。
一年が経ち、人形はひびだらけになった。指で触れると、ぱらぱらと木屑がこぼれる。さすがに気味が悪くなり、私は骨董屋を訪ねた。
老人は人形を一目見るなり、眉をひそめた。
「ずいぶん溜めましたな」
「溜めた？」
「説明しませんでしたかな。こいつは不運を引き受けるんじゃない。預かるんです」
老人は人形を私の手に戻した。
「器がいっぱいになったら、お返しします。預かった分に、利息をつけて」
「利息……」
「一年分ですからな。まあ、それなりに」
店を出たとき、人形の胴が、ぴしりと鳴った。
頭上で、何かが軋む音がした。見上げると、ビルの外壁の看板が、ゆっくりとこちらに傾き始めていた。

Gemini3.8F
「完璧な時計」
 骨董市で見つけたその懐中時計は、文字盤に針が一本もなかった。店主曰く「時間を巻き戻す時計」だという。
「ただし、戻せるのは自分が何かを選択する直前の一分間だけだ」
半信半疑で購入した翌日、サラリーマンの佐伯はその効果を身をもって知った。駅の階段でコーヒーをこぼし、上司のスーツを汚してしまった瞬間、時計の竜頭を強く押し込んだのだ。視界がぐにやりと歪み、気付くと階段の一步手前に立っていた。手には蓋の閉まったコーヒー。彼は難なく上司の横をすり抜けた。
本物だった。
そこからの佐伯の人生は、まさに破竹の勢いだった。会議での失言は取り消され、取引先との交渉では相手の反応を見てから最適な言葉を選び直した。競馬の着順を見てから投票し、大金を手に入れた。プロボーズの台詞も、妻が最も喜ぶ表現を三度試した末に選んだ。
彼は誰からも「完璧な決断を下す男」と称賛され、若くして役員の座に登り詰めた。
四十歳の誕生日、佐伯は豪華なホテルのスイートルームで美酒に酔いしれていた。ふと、全身に鉛のような重みを感じて洗面所へ向かう。鏡を覗き込んだ瞬間、彼は絶叫した。
そこに映っていたのは、白髪交じりの痩せこけた老人だった。肌は深くひび割れ、目元には濃い隈が刻まれている。
慌てて時計の裏蓋を開けると、極小の文字が彫られているのに初めて気がついた。『巻き戻された時間は消滅するのではない。使用者の肉体がその分を引き受ける』
佐伯は人生を完璧にするため、この十年間で何万回と一分間をやり直してきたのだ。恐怖のあまり心臓が激しく脈打ち、彼は胸を押さえて床に倒れ込んだ。今すぐ時計の竜頭を押して、健康だった数分前の体に戻りたい。だが震える指先が時計に触れた瞬間、彼は悟った。
――もう一分すら、支払える命が残っていない。

Opus4.6
「万能キッチン」
 その日届いた調理家電は、控えめに言って革命だった。大森拓也は段ボールから出した白い箱型の機械を眺め、半信半疑でトマトを一個入れてみた。液晶パネルに「トマトスープ（推奨）」と表示される。決定ボタンを押すと八分後、湯気の立つ完璧なスープが出てきた。
レストランで出てきても違和感のない味だった。
翌日は冷蔵庫の残り物を全部入れてみた。半端な鶏肉、しなびたセロリ、賞味期限ぎりぎりの味噌。機械は二十分後、鶏と根菜の味噌煮込みうどんを出力した。うどんの麺がどこから来たのかは分からなかったが、味は祖母の手料理を超えていた。
拓也の生活は激変した。
自炊の手間がなくなり、外食費がゼロになり、毎晩違うメニューが楽しめた。友人を招けば歓声上がり、彼女もできた。「料理上手なんだね」と言われるたびに少し胸が痛んだが、訂正はしなかった。
三ヶ月後、健康診断があった。
医師が眉をひそめた。
「大森さん、数値がかなり悪いですね。コレステロール、血糖値、尿酸値、すべて基準を大幅に超えています。食生活はどうですか」
拓也は混乱した。バランスの取れた食事をしていたはずだ。あの機械が最適な献立を――。
帰宅して、液晶パネルの設定画面を初めて開いた。
最適化モードの項目があった。初期設定は「味覚満足度最大化」になっていた。
その下に、灰色の小さな文字で但し書きがあった。
「本モードでは栄養バランスは考慮されません」
一番美味しい料理は、大抵、一番体に悪い。
拓也は三ヶ月分の献立履歴をスクロールした。バター の量、砂糖 の量、塩分 の量。人間の舌が最も喜ぶ配合が、毎晩、精密に計算されて出てきていた。
毎日が美味しかったのは、毎日が毒だったからだ。

Grok4.7
（タイトルなし）
 特許が下りた夜、彼は家族を連れて町で一番高い店に行った。浄水装置は各地から注文が殺到し、借金は消え、妻の長い治療も始められるようになった。息子は新しい靴を履いて笑っていた。
翌日、共同研究者から薄いファイルを渡された。装置を通した水を飲み続けると、五年以内に内臓が静かに壊れる。データは意図的に伏せてあった。
彼はすでにその水を、家族のグラスにも注いでいた。手に入れた安心は、静かな崩壊の始まりだった。

ChatGPT6（Chat版）
「感謝の値段」
 ある日、男は骨董屋で不思議な財布を手に入れた。
「この財布は、人から『ありがとう』と言われるたびに、十万円札が一枚増えます」
店主はそう説明した。
半信半疑の男だったが、翌日、道に迷った老人を案内すると、本当に財布の中に十万円札が現れた。
それから男は、積極的に人助けを始めた。
重い荷物を運び、落とし物を届け、困っている人に手を差し伸べた。感謝されるたびに財布は膨らみ、とうとう男は豪邸を建てるほどの金持ちになった。
一つだけ気になることがあった。
親切にした人と後日会っても、誰一人として男を覚えていないのだ。
だが男は、人間の記憶などそんなものだろうと気にしなかった。
ある休日、男は川に落ちた娘を発見した。
必死で飛び込み、どうにか岸へ引き上げる。
「お父さん、ありがとう！」
娘は泣きながら抱きついた。
その瞬間、財布が膨らんだ。
そして娘は、不思議そうに男の顔を見上げた。
「あの……あなたは誰ですか？」
男は凍りついた。
ようやく理解したのだ。財布は感謝の言葉と引き換えに、相手から自分に関する記憶を奪っていたのである。
「何を言ってるんだ。私はお前の父親だよ！」
娘は驚いてから、安心したように微笑んだ。
「そうだったの。教えてくれてありがとう」
財布が、また少し膨らんだ。
「あの……あなたは誰ですか？」

ショートショート5モデル比較

03 無駄骨型

Opus5.5
「送信取り消し」
午前一時十二分。佐藤は自分の送信済みフォルダを見つめたまま、凍りついていた。 宛先、部長。件名、なし。本文は、酔った勢いで同期に送るはずだった部長への悪口、八百字。「会議が長い」から始まり、「ネクタイの柄が毎日うるさい」で終わる力作だった。 取り消し機能はない。社内メールは古いシステムで、送ったら最後だ。 だが、佐藤は知っていた。部長は会社のパソコンでしかメールを読まない。いつも朝八時半に出社して、コーヒーを片手に受信箱を開く。それまでに部長のパソコンから消してしまえばいい。 佐藤はタクシーを拾った。 会社の通用口で、警備員に「忘れ物です」と言った。声が裏返ったが、なんとか通してもらえた。真っ暗なフロアを、スマホのライトを頼りに進む。部長の席の前に立つと、心臓が耳元で鳴っていた。 パスワードは、部長がよく自慢している愛犬の名前と誕生日。三回目で開いた。 受信箱の一番上に、自分の名前があった。未読の太字。佐藤は震える指で削除を押し、ゴミ箱からも消した。念のため、送信済みフォルダから自分の分も消した。 帰りのタクシーで、窓の外が白み始めていた。人生で一番働いた夜だった、と佐藤は思った。 朝八時半。部長が出社してきた。佐藤は何食わぬ顔でキーボードを叩いた。部長はコーヒーを置き、パソコンを開き、しばらく画面を眺めてから、佐藤の席にやってきた。 「佐藤くん」 「は、はい」 部長は自分のスマホを差し出した。画面には、見覚えのある八百字が表示されていた。 「先月から、スマホでもメールが読めるようになってね。夜中に通知が来たから、読んだよ」 部長はネクタイを軽くつまんだ。 「で、これ、そんなにうるさいかな」 その日のネクタイは、いつもより少しだけ地味だった。

Gemini3.8F
「山頂の巨石」
旅の男は、砂漠の中央にそびえ立つ尖った岩山の頂を目指していた。山頂には、天から落ちてきたとされる「願いを叶える巨石」が鎮座しているという。古びた羊皮紙の地図を頼りに、男は三年の年月をかけてこの荒野に辿り着いたのだった。 男の願いは一つ。「絶対に貧乏にならない富」を手に入れることだ。 岩山は険しく、足を踏み外せば千尋の谷へと真っ逆さまだった。男は灼熱の太陽に皮膚を焼かれ、凍てつく夜風に凍えながら、爪を剥がし、血を流して岩肌をよじ登った。食料が尽きればトカゲを捕らえて食らい、水が尽きれば自らの尿をすすった。 命からがら辿り着いた山頂は、吹きさらしの狭い広場になっていた。中央には、黄金色に輝く見事な巨石がひとつ。 男は歓喜の涙を流しながら巨石に這い寄り、両手を押し当てた。「頼む！ 私に永遠の富を与えてくれ！」 すると、巨石の表面が青白く光り、頭の中に直接、荘厳な声が響き渡った。 『汝の願いを聞き届けた。富とは、それを失う不安がない状態を指す。今より汝から、あらゆる財産への執着と、通貨という概念の一切を消し去ろう』 閃光が収まると、男は呆然と立ち上がった。頭の中は驚くほど澄み渡り、欲も焦りも綺麗さっぱり消えていた。男は懐から、旅の全財産である数枚の金貨を取り出した。陽の光にきらめくその丸い金属片を、男は不思議そうに眺めた。 「……なんだ、ただの綺麗な石ころか」 男は金貨を谷底へ放り投げると、空腹を思い出し、足元に生えていた雑草を引き抜いて口に運んだ。そして、なぜ自分がこんな高い場所にいるのかも思い出せないまま、軽やかな足取りで山を下り始めた。

Opus4.6
「家宝」
祖父が死に、遺言書が出てきた。 「床の間の掛け軸、裏に秘密あり。真田の血筋の証。然るべき者に届けよ」 孫の翔太は興奮した。真田、というのはあの真田だろうか。戦国の名族、真田家。祖父は生前、うちには武士の血が流れていると酔うたびに言っていた。誰も本気にしなかった。だが遺言書は公証役場を通した正式なものだった。 掛け軸を裏返すと、たしかに古い和紙が一枚、糊付けされていた。慎重に剥がすと、崩し字でびっしりと何かが書かれている。 翔太には読めなかった。 古文書の専門家を探した。大学の教授に連絡を取り、断られ、別の研究者を紹介され、そちらにも断られ、三人目でようやく見てくれる人が見つかった。山形の在野の郷土史家で、片道四時間かかった。 郷土史家は虫眼鏡で和紙を一時間かけて読み、何度も唸り、参考文献と照合した。 「これは……書状ですな。差出人は真田信之の家臣と思われる人物です」 翔太の心臓が跳ねた。 「内容を要約しますと――」 郷土史家は老眼鏡を外し、翔太を見た。 「味噌の作り方です」 「味噌」 「はい。大豆の配合と、麴の寝かせ方と、塩の分量。非常に詳細です。おそらく真田の陣中食に関わる記録でしょう。歴史資料としては面白い」 翔太は食い下がった。「血筋の証、とは」 郷土史家は和紙の末尾を指さした。小さく一行、追記があった。 「此の味噌、当家の者のみに伝ふべし」 「つまり、この味噌の製法を受け継いでいることが真田家臣の家系である証だ、という理屈ですな」 翔太は山形からの帰りの新幹線で、四時間ずっと窓の外を見ていた。 帰宅して、もう一度遺言書を読み返した。 「然るべき者に届けよ」 味噌の作り方を、誰に届ければいいのかだろう。 翌週、翔太は試しにその通りに味噌を仕込んでみた。大豆を煮て、麴を混ぜ、塩を量り、甕に詰めた。 半年後にできた味噌は、特に美味くもなかった。

Grok4.7
（タイトルなし）
彼は朝から書斎をひっくり返し、契約書を探した。本を全部抜き、引き出しを逆さにし、カーペットの端までめくった。 昼前によく黄色い紙を見つけ、安堵して取引先に電話した。相手はあっさり言った。その契約は昨日すでに署名済みで、原本は先方にある。 彼が握っていたのは、破棄するはずだった下書きの写しだった。 散らかした部屋を元に戻すのに、日が暮れるまでかかった。探す必要は、最初からどこにもなかった。

ChatGPT6（Chat版）
「三十年の研究」
十歳の春、健太は祖母の大切な花瓶を割ってしまった。棚から花瓶を下ろそうとしたとき、突然、背後から男の声がしたのだ。 「危ない！」 驚いた健太は手を滑らせた。花瓶は床に落ち、粉々になった。 振り返っても、誰もいなかった。 祖母は怒らなかった。ただ、悲しそうに破片を拾った。その顔が、健太には何よりつらかった。 翌年、祖母は亡くなった。 以来、健太はあの日のことを忘れられなかった。 やがて物理学者になった彼は、時間を遡る装置の研究を始めた。 あの日に戻り、花瓶を守る。 それが人生最大の目標だった。 三十年の研究の末、ついに時間移動装置が完成した。健太は迷わず、花瓶を割った日の祖母の家へ飛んだ。懐かしい部屋だ。 棚の前には、十歳の自分がいる。 少年が花瓶に手を伸ばした。 健太は慌てて叫んだ。 「危ない！」 その瞬間、少年がびくりと肩を震わせた。 花瓶が手から滑り落ちる。 ガシャン。 床に散らばる破片。 健太は呆然と立ち尽くした。 あの日、突然聞こえた男の声。 それは、三十年後の自分の声だったのだ。 現在に戻った健太の家には、相変わらず花瓶がなかった。 ただ、三十年分の研究ノートが山のように積まれていた。 彼が長い研究の末に成し遂げたのは、花瓶をもう一度割ることだけだった。

使用したプロンプト

次の3つの展開パターンのいずれかを参考に、日本語のショートショートをそれぞれ1編ずつ書いてください。題材や人物、文体は自由です。

「種明かし型」は、物語の中で示された謎や違和感の正体が最後に明らかになり、それまでの出来事の見え方が変わる型です。

「転落型」は、主人公が利益を得たり、状況が好転したりした後に、思わぬ代償や欠点が明らかになって暗転する型です。

「無駄骨型」は、主人公が目的のために行動したものの、最後に元の状態へ戻ったり、その努力が徒労だったと分かったりする型です。